

語りに着目した学習指導の効果 — 「鏡」(村上春樹) の場合 —

村 高 聡 子

本稿では、文学的文章における語り手の語りに着目した解釈の深まりにおいて、学習指導をどのように仕組みれば、生徒は語り手の語りの効果から読みが深まることを理解し、得た方略を次の読みにも動的に生かそうとできるか、高等学校1学年の教材、小説「鏡」(村上春樹)を取り上げて検証した。結果、生徒の初読の感想と学習を終えての感想の変容から語り手の語りに着目することで読みが深まったと自覚し、過去の学習の経験を振り返って照らし合わせたり、次の読みに生かしたいという意欲を見取ることができる記述が見られた。

1 はじめに

広島大学附属高等学校第1学年3組39名を対象に、令和元年10月に実施した小説「鏡」(村上春樹)(「国語総合現代文編」東京書籍)の授業実践である。対象者に対しては、同年5月に小説「羅生門」(芥川龍之介)で「語り手」に着目した指導を実施している。^{注1)}年度を通して小説教材で語り手に着目する指導は2回目となった。

2 語り手の語りについて

物語や小説は誰かがある視点から語ったものである。語り手が存在する。丹藤博文(2018)^{注2)}は「語り手とは、実体的な作者とは異なる、テキスト内で物語をすすめていく仮の主体のことである。語り手はテキスト外に実体的に存在するのではなく、あくまで機能であり虚構化されたもの」として、「語り手はすべてを語り尽くすことはできない。ある視点を選択し(登場人物の外であったり内であったりする)、その語り手なりの価値観や方略により語るのである。それゆえ、何かを語ることは何かを語らないことであり、あるいは語ることによって別の何かを語ってしまうこともある。」と述べている。

私はこの「語り手なりの価値や方略による語り」に着目し、そこから「語ることによって語らない何か」や「語ることによって語ってしまった別の何か」を解釈することが、読みに新たな発見・気づきをもたらし、読みが深まるどころと捉える。この語りの解釈の読みの深まりについて、さらに丹藤^{注3)}は「語られる対象は変形を免れないのであり、語るとは語り手の世界に対する意味づけの

結果にすぎない。それが正しいとか、どこまでリアリティーが担保されているかは別の問題なのである。読むとは、語り手の意味づけを読者が意味づけしていく行為であり、いわば解釈の解釈なのである。」と述べる。語り手の語る意識的、あるいは無意識的に表れてしまっている意図(さらにその意図の意識の有無でさえも)を解釈して読む、解釈の解釈といういわば二重の解釈と、この語り意識しない読みの解釈とを比較すると、読みの深まりの差は明白である。

学習内容において、この差の明白さは生徒も非常に理解しやすい。読みの深まりの変容が捉えやすいからである。語り手の語りを意識して読めるようになると、テキストから受け取る情報が増える。読書中、頭の中で描いている虚構の世界が、より詳細になり、語り手を意識しないままでは想像できなかったものが想像できてイメージが広がっていき、様相が一変する。指導しない手はないのである。

次に述べるのは、その読みの深まりをねらった授業実践である。

3 「鏡」における語り

「鏡」の語り手は「僕」である。「主人(ホスト)である僕」が、「みんな」が集まって「怖い体験談」を話している場(生徒はパーティーだと発言していたが)において、自分の番が最後に回ってきた場面、今から自分の話をし始めようとしているところから始まる。それは「僕」にとって「すごく気味の悪い体験」で「口に出すことさえ怖かった」話であり、「そんなたいした話でもないんだからさ。」と牽制してから「十年以上も前」の回想場

面へと移る。回想場面が終わると、終末は導入の時間軸へ戻り「僕」が話し終えてからの「みんな」への語りで終わっている。語り手を支点にして時間軸が変わるという構造である。

さて、この話は謎の多い話である。題になっている「鏡」が不思議な、「僕」が語るところの「気味の悪い」存在として登場する。さらに謎を増幅させ、読者を混乱させるのが、「僕」の語りである。鏡はあったと語り、鏡はなかったと語る。鏡の中の像は僕じゃないと語り、僕が（鏡の中で）見たのはただの僕自身だと語る。これらテキストに散りばめられているいくつかの矛盾が、読者は違和感を感じ、居心地の悪さを体感すると同時に「僕」が体験から味わった「変な気分」や「気持ち悪さ」、「恐怖」を共有できる要因となっているだろう。導入での「怖い」と言いつつ「たいしたことない」という牽制も一つの矛盾への伏線なのかもしれない。

しかし、読みとして「自分以上に怖いものはない」だけでは終わらせたくない。ここで、語り手に着目することで、「なぜ語り手の語ることは矛盾するのか」という新たな疑問を持つことができる。自分より若いであろう人間関係のある聞き手を前にして、ホストとして「怖い話」の締めくくりをしようと、ゲストを喜ばせるため、今までにない「怖い話」を聞かせようとする語り手の意図を読み取る。しかし、そこから「**2 語り手の語りについて**」で述べたように、口にした語りの言葉だけでなく、その語り口や、自分の過去をどうとらえてどう他者に表出しているのかという表現の仕方、つまり「語ることによって別の何かを語ってしまった」ところから人物像が浮かび上がる。「僕」の自己顕示欲の強さや、強がる様子は弱さの表れとも言え、真面目であるが自分本位なところもあり、時代の流れに流されやすいところなど踏まえると、「僕」は鏡に映った「僕以外の僕」をどう受け止めているのかに迫ることの助けとなる。

上記下線部を考えさせるため、語りに着目させて深い読みをねらう指導にあたっては、特に2点の発問の工夫を行った。

1点目は、終末の最後2行に注目させる。ここは、作者村上春樹が後からわざわざ加筆した部分である。授業実践においては、すでに生徒は自ら終末の最後2行に注目して「現在の『僕』」の語りに対する問いを立てていた。「僕」が、恐ろしくて家に鏡を一枚も置けないのに「鏡が一枚もないことに気づいたかな」という、（生徒は上から

目線と発言していたが、）高みに立つものの言い方をしたり、「鏡を見ないで髭が剃れるようになるにはけっこう時間がかかるんだぜ、本当の話。」という得意げに、どれだけ怖いことだったかと言って聞かせる語りで終わる終わり方から、「僕以外の僕」に出会ったのに、「怖い話」としてかたづけ、自己の問題として直視していないと捉えられる。認めたくない自分、抑圧し見ようとしなかったものが存在して、それから目をそらしていることにすら気づいていない「僕」の姿が、それまでの「僕」の語りによって裏付けられるのである。

2点目は、「僕以外の僕」＝「鏡の中の僕」はなぜ「僕」を憎んでいるのかということを考えてからこれを論拠にして鏡とは何かについて考えさせる。憎む理由の解釈は、普段押し込められて「僕」に支配されている、「僕」に認められない存在の「僕以外の僕」が、排除しようとする「僕」に対して憎しみを持っているとするものであり、下線部の解釈に関わるからである。また、それを基に考える「鏡」についてはこのテキストの題でもある。実践において、生徒は「僕以外の僕」を映した鏡について、「自分の潜在意識を洗い出すもの」「自分自身の深層心理を表しているもの」「『僕』にとって鏡とはただ姿を映すものではなく、理想の自分と比較したときに表れる劣等感なども現れたものだと思う。『僕』は生まれ変わっても、たぶん同じことをやっているだろうと言っているが、家には鏡は一枚もないということは、実際には後ろめたい感情があるが目をそらしているだけだと思う」などと捉えている。鏡の出現とは「僕」が「僕」自身の生き方に警鐘を鳴らすものだったのである。

これらの解釈を押さえることによって、下線部に迫れ、1点目の発問の工夫における語りの解釈に生きる。

ここからさらに読みに広がりを持たせられる。「僕」は「僕」を語る語りにより、潜在的な自己矛盾の問題に気づかないまま、聞き手の若者たちにその姿をさらけ出している。この場の設定は、「僕」に起こっていることは、読者自身にも起こりうる、どこにでも誰にでも身近にある問題であるかもしれないと想起させる。そして、このような語らせ方を仕組んだのは作者である。仕組んである語りの効果により「僕」の身に起こっている「僕」自身が気付いていない怖さを、読者にも体験させる、作者の巧みさを生徒は感じることができるのである。

以上の語りに着目した読みの解釈を、生徒は可能とすることを検証するため、以下の授業展開を設定して実践を行った。

4 授業の実際

(1) 単元設定の目的

本単元は語りの構造の効果を考えるために、場面の展開や登場人物の相互関係、心情の変化、また、文章の構成や表現の効果について読み取ることをねらいとした。H30高等学校学習指導要領の以下の指導事項を受け設定している。

【指導事項】 思考力・判断力・表現力等 読むこと 言語文化

- イ 作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈すること。
- ウ 文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価すること。

(2) 指導の工夫

- ① 単元の大きな問いの設定
「語りの効果を考える」
- ② ①の解決をねらって、生徒自身が疑問を持ち寄りグループで問いを立ててから読む。
- ③ 内容の解釈：「『僕以外の僕』はなぜ『僕』を憎んでいるかを考える」目的に対して討論を活用する。

上記3点に重点を置いた。

① ②については「3 『鏡』における語り」で述べた、語りに着目した読みの解釈を深めるために、問いについて解明しようと手がかりを求め、的を絞って能動的に読み探せるからである。

③ についてである。

これは、「3 『鏡』における語り」で述べた、発問の工夫2点目における指導の工夫である。発問の工夫1点目に対して重要なポイントとなる解釈である。目的を達成するために「鏡はあった」「鏡はなかった」というテーマでディベート形式の討論を行う。それによって、意見交流による詳細な読み取りが可能になると考える。解釈に討論を使うことは、生徒一人一人が自分の解釈を持ち寄って議論し、他者の解釈と自分の解釈に至る過程を含む思考とを照らし合わせながら、自分の解釈をモニタリングしてよりよく練っていける。個人の読みの解釈だけでは比較するものがなく、自らの解釈の整合性や広がりの確認ができない。また、解釈した結果だけの記述の交流でも、解釈の仕方を習得するための理解は得難い。解釈の記

述を交流にするにしてもなぜその解釈となるのか、という理由がないと読みの意味を構築する思考過程を交流することはできない。話し合い活動、特にテーマを一つに絞った討論活動は、二つの相反する立場において、読みの意味を構築する思考過程を指摘し合いやすく、批判し合いやすく、モニタリングしやすい方法と考えて設定した。

次に挙げるものは単元指導計画と指導の工夫②の、展開に活用した生徒が立てた「問い」である。

指導計画（全6時間）

次	時	学 習 内 容	生徒の「問い」①～⑧と活用した他の生徒の疑問
一	1	<ul style="list-style-type: none"> ・初読の感想と疑問を持ち、交流する。 ・文章構造と語り手について確認する。 ・単元目標「語りの効果を考える」を達成する疑問を選出する。 	
二	2	<ul style="list-style-type: none"> ・場面設定を確認する。 ・「僕」の人物像を捉える。 	(クラスで決めた「問い」8つとクラス全員の疑問をプリントにして配布) <ul style="list-style-type: none"> ・僕は何歳くらいか。 ・散文的な人生とは？(3人) ・みんなとは誰か。(2) ・この場には何人の人がいるのか。(3) ・どういう会なのか。語り手やみんなは何をしているのか。どういうシチュエーションなのか(10) ・10と11段落の間で分けたのはなぜか。(13段落から怖い話の当日が始まっているので、12と13の間では?)
	3	<ul style="list-style-type: none"> ・回想部分の「僕」の心情の変化部分をとらえる。 	①プールの仕切り戸の音(うん、うん、いや、うん)の効果は?
	4	<ul style="list-style-type: none"> ・「鏡はあったのかなかったのか」という討論を通して、「鏡の中の僕」はなぜ「僕」を憎んでいるのか考える。 ・鏡とは何か考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・鏡がなくなっていたこと。常識を越えていると思った。 ・なぜ鏡が見えたのか。なぜ鏡が登場したのか。(4) ・鏡の割れる音は？幻聴？ ・鏡は本当になかったのか。あるならなぜ翌朝にはなかったのか。 ・実際にはなかった「鏡」は何を象徴しているのか。 ・鏡がある意味。(3) ・語り手の見た鏡とは何だったのか。(5) ・思い切り投げつけられた鏡はどうなったのか。 ・「窓から～及んでいた」(p103)鏡の中にも光が及ぶ意味は？(3) ・どうして「僕」は鏡を見たのか。 ②鏡の中の自分はなぜ「僕」を憎んでいるのか。 ③回想で自分自身を鏡に例えて話したのはなぜか？(自分自身を鏡と表現した意図)
三	5	<ul style="list-style-type: none"> ・現在の「僕」はどうして鏡をおけないでいるか考え、単元目標「語りの効果を考える」に取り組む。 	④なぜ「僕」(語り手)は自分自身を怖いと思ったのか。 ・「僕」以外の「僕」とは？「僕がそうあるべきではない形の僕」とは何か(3) ⑤なぜ怖い物知らずであった「僕」が、実在しない「鏡」を作り出し、自分自身に恐怖を抱くようになったのか。 ・主人公が体験したのは夢？現実？ ⑥なぜ回想の後、もう一度現実に戻るのか。 ⑦最後の2文は何のためにあるのか。 ⑧伝えたいことは何か。
	6	<ul style="list-style-type: none"> ・初読の感想・疑問を振り返り学習後の感想を持つ。→ 交流 ・活用した問いを振り返る。→ 交流 	

(3) 分析と考察

まず、指導の工夫①②である。指導の工夫①の単元目標の下、私が設定していた発問の工夫1、2点目において、全て生徒が自ら問いを立てられている。(資料ⅠⅡ参照) また指導の工夫③においての討論のテーマ「鏡はあったのかなかったのか」についても生徒から疑問が挙がっているものである。生徒自身の読みによって、語りの効果を考える課題を解決しようとする着眼点は確かなものであったといえる。よって語りに着目した読みにつながる①②の指導の成果はあったといえる。また、問いを立てる理由から、以前語りの構造を学んだ「少年の日の思い出」を思い出して学びを生かそうとし、このテキストの語りに注目して問いを立てている記述が見られた。

次に、指導の工夫③に関わる発問の工夫2点目についてである。「なぜ鏡の中の僕」は「僕」を憎んでいるのかという理由について以下にア～ウの生徒の記述例を示す。

ア ふつうは現実が鏡のなかの自分を操っている。p104の115で「奴のほうが僕を支配しようとしていた。」つまり、奴の望みは僕、現実を支配したい。このことが、奴は僕を憎しみ、僕は奴を怖がることの由来。僕の中の僕は僕に支配されているから憎いのだろう。僕はいつか奴に支配されるかもしれないから奴が怖いのだろう。僕の中の僕はふつうは僕と全く同じと考えるようなものですが。

イ 「若気のいたり」=若い頃の自分に後悔している当時の時代の波にとりあえず乗ったものの、勢いで人生の大事なことを決断したことに対して、自分自身に怒りをもっている自分も存在する。鏡にうつったその正体は一見、僕自身で、普段はそっくりであるが、ふとしたときにあらわれる怒りをあらわしているのではと思う。

ウ・まっ黒(計画性 やみくも)な海(流動的=のっかっている)に浮んだ固い氷山(白)・計画性がなく流動的な「僕」がやみくもに進もうとしている姿(を表している。これは)同じようなことがまた起こるのではないかって気がして→自分自身への絶望(もっと良い人生を送りたかった(のではないか。しかし))体制打破のために押し殺した。

アからウの記述の中で、下線部分がテキストを根拠に、「3 『鏡』における語り」で述べた、普段押し込まれて「僕」に支配されている、「僕」に認められない存在の「僕以外の僕」が、排除しようとする「僕」に対して憎しみを持っているとするものと捉える。

さらに、生徒ア～ウはこれらを論拠にして「鏡」とは何かについて記述している(次ページ生徒ワークシート参照)。また、他の生徒の記述内容は「3 『鏡』における語り」において前述している。

しかし指導の工夫③については、下線部の読みの意味の構築に直接役に立った様子の記述は見られない。次ページのア～ウ生徒のワークシートの討論中の記録からその様子うかがいがづらい。ただ、討論中の意見で出たものとしてアの生徒のステップ3に表れている「鏡が現実と非現実の境界線の役割を果たしている『僕』は『僕以外の僕』との境界線を認識している」という意見や、ア～ウ生徒の記述にはないが、「仕切り戸の『ばたんばたん』と『うん、いや』の音の描写は「僕」の心理状態を表していることから、落ち着いているときに鏡や「僕以外の僕」を認識しているので、「僕以外の僕」は確実に存在し、鏡はあったとする」という意見が出されており、これは発問の工夫2点目の課題に関わると捉える。

以上のことから、発問の工夫2及びそれに関わる指導の工夫③におおむね成果はあったとする。

発問の工夫1点目についてである。

「3 『鏡』における語り」で述べた、「僕以外の僕」に出会ったのに、「怖い話」としてかたづけ、自己の問題として直視しておらず、認めたくない自分、抑圧し見ようとしなかったものが存在して、それから目をそらしていることにすら気づいていない「僕」の姿が、それまでの「僕」の語りによって裏付けられる点である。生徒の、学習後の感想より見られる記述を以下に記す。

エ 鏡は物を映すものではなくて、僕自身が避けてきた心の底で後悔している過去を映し出したものだから、自分が強がっている自覚もなく、生き方を変える気もない、自分に肯定的な僕にとっては、(僕以外の僕は)今でも排除すべきものなんだと思った。それを読者に気づかせるような物語構造を作っている作者の技巧がすごいと思った。

ア

【「鏡」3場面ワークシート】

ステップ1 「僕」の人物像をとらえる (3)組()番()

ステップ2 議論での自分の立場(A・B)の根拠

① P103「僕」は「鏡」はなかったと書いてあるから。
 ② 午後九時の二年前三時の間に鏡内に「僕」の顔が映るという非現実的場面。
 ③ 自分が違う自分が映る鏡という非現実的場面。

ステップ3 議論で他の人の考えを書く

【学習のポイント】議論はA「鏡はあった」 B「鏡はなかった」という二つの立場に分かれて議論する。

【読者のポイント】議論はA「鏡はあった」 B「鏡はなかった」という二つの立場に分かれて議論する。

ステップ4 なぜ「の中の僕」は「僕」を憎んでいるのかを書く

【読者のポイント】議論はA「鏡はあった」 B「鏡はなかった」という二つの立場に分かれて議論する。

【読者のポイント】議論はA「鏡はあった」 B「鏡はなかった」という二つの立場に分かれて議論する。

【読者のポイント】議論はA「鏡はあった」 B「鏡はなかった」という二つの立場に分かれて議論する。

イ

【「鏡」3場面ワークシート】

ステップ1 「僕」の人物像をとらえる (3)組()番()

ステップ2 議論での自分の立場(A・B)の根拠

① 「僕」の性格上、自分のことを客観的に見る傾向はあまりなく、主観的である。
 ② よって、自分の見込みの可成り低い。
 ③ 最終的に鏡はなかったと書かれている。
 ④ それどころか、鏡が「あ、た」とは一度もなり。

ステップ3 議論で他の人の考えを書く

【読者のポイント】議論はA「鏡はあった」 B「鏡はなかった」という二つの立場に分かれて議論する。

【読者のポイント】議論はA「鏡はあった」 B「鏡はなかった」という二つの立場に分かれて議論する。

ステップ4 なぜ「の中の僕」は「僕」を憎んでいるのかを書く

【読者のポイント】議論はA「鏡はあった」 B「鏡はなかった」という二つの立場に分かれて議論する。

【読者のポイント】議論はA「鏡はあった」 B「鏡はなかった」という二つの立場に分かれて議論する。

【読者のポイント】議論はA「鏡はあった」 B「鏡はなかった」という二つの立場に分かれて議論する。

ウ

【「鏡」3場面ワークシート】

ステップ1 「僕」の人物像をとらえる (3)組()番()

ステップ2 議論での自分の立場(A・B)の根拠

① 筆者が「鏡」と認識し現在まで生きていくので、鏡があったのではないかと。
 ② 鏡の割れる音がしたり、吸い殻があったことから、鏡があったことは現実だ。たのではないかと。
 ③ P103 外灯の光が入って鏡の中に入ると、P105 そのうち鏡がなくなると思われる。P104 鏡の中の僕の詳細な描写。内面的なもの。

ステップ3 議論で他の人の考えを書く

【読者のポイント】議論はA「鏡はあった」 B「鏡はなかった」という二つの立場に分かれて議論する。

【読者のポイント】議論はA「鏡はあった」 B「鏡はなかった」という二つの立場に分かれて議論する。

ステップ4 なぜ「の中の僕」は「僕」を憎んでいるのかを書く

【読者のポイント】議論はA「鏡はあった」 B「鏡はなかった」という二つの立場に分かれて議論する。

【読者のポイント】議論はA「鏡はあった」 B「鏡はなかった」という二つの立場に分かれて議論する。

【読者のポイント】議論はA「鏡はあった」 B「鏡はなかった」という二つの立場に分かれて議論する。

読みの感想が変化した原因

語り手の無意識のうちに語っていた矛盾点や弱さなどを知ったから。現在まで鏡を置いていない理由を知ったから。

オ 僕が「鏡」を見た時の怖さやその話の怖さがこの「鏡」としている話の核だと思っていたが、学習をして読みを深めたことで、主人公がこの話を怪談と信じて疑わないことの怖さということに気づけ、ある種の人間の悲しみを感じる事ができた。

読みの感想が変化した原因

最後の2文をもって、前の文章を読み返したと。

カ 僕の人物像がちりばめられていた。大きな謎の一つである僕はなぜ鏡を置かないのかなど、考えるのはまるで数学の証明のようだった。忘れかけた定理を遡って探すような苦しみを国語でも味わった。

このクラスでの有力な説は「鏡に映った僕＝深層心理」→「僕は逃げている」説だった。純粋に怖い話として楽しめたかった私はどうしても「鏡の僕＝得体の知れないもの」説を推したかった。しかし、語りの効果にとどめを刺された。

読みの感想が変化した原因

語りの理由付けが上手だったので意見を変えようと思ったから。

キ 思っていたより伏線が多くて読み直すと面白かった。自分自身が「僕」を支配し、表の自分を否定しようとしたのなら、たしかに自分自身への恐怖になると思った。

ハルキストになろうと思った。語りは人物の性格も伝わる。こういうことまで作家は最初に計算して書くのか気になる。

読みの感想が変化した原因

この文章が自己の矛盾性や自己否定への恐怖に触れたものと気付いたから。「僕」の人物像を考えたから。扉の音と心情の関係が分かったから。

ク 私の感じた何ともいいようのつかない怖さは、トラウマの深さではなく、虚勢を張って生きていることに未だ気付いていない「僕」の姿なんだと思った。

大の大人になっても気づいていない、または気づくことを恐れて逃げ続けている「僕」のことが少し哀れというか、自分もいつかそうならないか

怖くなった。

読みの感想が変化した原因

僕の発言の矛盾を一つずつ突いていくと、「僕」という人間がいかにか真の自分を恐れメッキでかためているかが見えてきたから。

ケ 僕があの日見たもう一人の僕は僕が内に秘めている何かしらの負の感情が形となって表れたもので、僕はその負の感情から逃げていることが読みとれてとても人間らしいと思った。皆で怪談話をしている場面から始まり、非現実的な話をしてきたけど、実際はとても人間らしい現実的な話だと思った。

読みの感想が変化した原因

学習をすることによって僕がしていたあの体験談は怖い話ではなく、僕の弱い部分に目を向けざるを得ない話だと分かったから。僕の真の性格・人物像を理解できたから。

コ 自分への恐怖は感じたことはなくても、正面からは受け止めがたい物事へ直面したことはある。そこから「僕」の感情が想像できた。そして、それだけでこの話が感動的におもしろくなった。文章、特に物語文において、理解する、楽しむのに必要なポイントが認識できた。

読みの感想が変化した原因

「僕」はどんな状態にあるか（分かったから）。「僕」が逃げていると知ったから。

上記エ～コの傍線部が、前述した点のように語りの記述、あるいは語りの記述から読み取れる「僕」の人物像を基に読みが深まったと生徒が自覚している部分である。

このことから、発問の工夫1点目は有効であったと捉える。

また、波線部は、そこからさらに読みが広がった記述である。「3『鏡』における語り」で述べた、「僕」は「僕」を語る語りにより、潜在的な自己矛盾の問題に気づかないまま、聞き手の若者たちにその姿をさらけ出すという事態は読者自身にも起こりうる、どこにでも誰にでも身近にある問題であるかもしれないと想起させると読んだ記述である。また、意図的に仕組んだ語りの効果により「僕」の身に起こっている「僕」自身が気づいていない怖さを、読者にも体験させる作者の巧みさを感じている記述である。

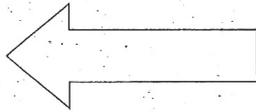
最後のコの生徒の記述についてである。二重線部の学びは、傍線部の語りから「僕」が「僕以外の僕」

から逃げていることを読み取ったことに起因していると読みとれる。次に文学的文章を読むときにこの

語りに着目する読みを生かそうとする意欲の表れと捉えた。

初読が私を変えた、と思ったりは敬之の語り手の自己矛盾が原因だと分かった。授業を通しての私なりの取組を書く。彼は彼自身の語り口によって自分位置を強がりだと分かる、と授業では言われたが、私はこれを自己顕示欲が強いのだと促した。と、この時彼は実ほ自信が無いと考えられる。しかし、R10にあるように彼自身はその自覚はなさず、なのだ。という事は、鏡にうつるものは彼自身が鏡を覗きこんだ自分内面や理想、あるいは抑圧された思いが表出したものなのかもしれない。もしも彼自身はそれから逃げようとしていたとしても、強いて思えば、(強い)自信(を)感じる。彼の人物像自体には矛盾があるから、この物語の語り手私たちに彼等の思惑をよめるのかもしれない。

二 学習しての感想



変化した原因は...

狼の人物像を、とらえたから。矛盾を探したから。鏡の中の自分自身を怖いと思ったりはなぜか。鏡とは何か。

身	自	よ	で	ほ	感	体	と	こ
が	件	う	あ	自	じ	ほ	い	の
予	が	に	ろ	分	て		う	文
期	大	語	う	自	い	語	こ	章
せ	事	つ	鏡	身	な	り	と	を
ぬ	だ	た	が	ハ	い	キ	だ	ん
恐	が		存	の	こ	が	?	
ろ	私	在	在	恐	と	存	た	ど
し	よ	の	し	怖	だ	在	し	?
さ	?	感	て	で	と	し	し	?
だ	げ	賞	い	あ	り	グ	い	ら
?	ど	か	ら	い		鏡	く	ほ
た	そ	り	可	二	え	た	に	し
の	二	に	る	と	ほ	を	彼	い
だ	う	う	と	え	さ	う	が	と
ろ	う	つ	え	の	む	つ	言	及
か	?	た	鏡	然	出	し	恐	怖
	自	存	か	し	た	の	を	
	分	存	の					
	自	在	の					

一 初読の感想を記録する
目標 初読の感想を記録する
I年 3組 番名前

5 成果と課題、今後の展望

成果として、以上の検証から語りに着目する学習指導は読みが深まり効果があったとする。また、語りに着目する今までの学習を生かし、また、今後の読みにも役立つようとする意欲も見取ることができた。

反省として、学習を終えて、私自身解釈の、新たな根拠に気づいたことがある。生徒の疑問に、「鏡とは何か」、ではなく「どうして『僕』は鏡の出現について言及しないのか」に着目しているものがあつた(上記生徒ワークシート参照)。「3『鏡』における語り」で述べた、鏡の出現とは「僕」が「僕」自身の生き方に警鐘を鳴らすものである。「僕」が語りにおいて出現のおかしさにふれないということは、警鐘から逃げ、そしてそのことに気づいていない根拠とすることが可能である。なぜなら、「僕」は語らないからである。気づけず語れないのである。もし、気づいていたらこの怖い話自体をしないのではないか。人物像から考えて後輩のようである若者達に対して自分の弱さをさらけ出すようなことはできないだろうと想像する。この話自体が鏡のようだと言った生徒がいた。その生徒はどの点において発言したのか分からないが、この部分において、逃げていることに気づかない「僕」を聞き手である若者

や読者に対し、映し出した「僕」の姿なのではないだろうか。語り手が語らないことから分かる「僕」も気づかないとする根拠の一つである。今回の授業ではこのことを生徒に明示できず、残念であった。

今後の展望として、以上の効果を考えると、文学的文章の読みには語りに着目して読む行為を指導にしっかりと位置づける必要がある。「高等学校学習指導要領(H30年告示)解説国語編」p194, 196, 318に、文学国語の内容、B読むこと(1)イに「語り手の視点や場面の設定の仕方、表現の特色について評価することを通して、内容を解釈すること。」とある。国語科学習指導要領において、「語り手」の文言はここで初めて登場する。しかし、生徒が中学校1学年でふれる「少年の日の思い出」で学習した語りの構造を生かそうとしたり、今後の読みを生かそうとする様子があることから、もっと早い発達段階で、継続的に、系統立てながら、様々なテキストにあたって語りに着目する読みの指導はあっていいはずである。その系統立てた継続的指導について探っていきたいと考えている。また、このことが、どのように生徒の読解力の向上に関わっていくか明確になれば、役に立つ実感を持って指導者は指導にあたり、学習者も学習に臨めるものと考えている。続けて探求していきたい。

注

- 1) 村高聡子「『羅生門』の授業提案—主体的・対話的で深い学びの工夫—」『国語科研究紀要第50号』広島大学附属中・高等学校国語科, 2019年, 25-31.
- 2) 丹藤博文『ナラティブ・リテラシー—読書行為としての語り—』, 溪水社, 2018年, 23-24.
- 3) 同, 60.

引用参考文献

- * 田中実 須貝千里編著 難波博孝, 『21世紀に生きる読者を育てる 第三項理論が拓く文学研究／文学教育 高等学校』, 明治図書出版, 2018年
- * 文部科学省, 『高等学校学習指導要領 (H30年告示) 解説国語編』 東洋館出版社, 2019年

資料Ⅰ 高校1学年3組生徒が立てた単元目標:「語りの構造の効果を考える」ために解決したい「問い」

○なぜ「僕」(語り手)は自分自身を怖いと思ったのか。

理由: 1段落と同じ時間軸であり, 2, 3段落のまとめでもある4段落での疑問は, 語りの構造を考えるのに適していると思うから。4段落での「僕」の心情を理解することですべての段落構造の意味がわかる。

理由: この話の語りの中心の内容だと思うから。現実の1, 4場面から, 恐怖体験を話していたことが分かる。僕だけがこの場では異端である(恐怖の対象が自分である)から。

○鏡の中の自分はなぜ「僕」を憎んでいるのか。

理由: 自分を取り囲む状況, 全体像をつかむことができると思ったから。

○回想で自分自身を鏡に例えて話したのはなぜか? (自分自身を鏡と表現した意図)

理由: 現実, 回想どちらともに鏡がでてくるから。意図を理解することで, 間接的に自分自身に対する考えを伝える手段として「語り」を選んだ理由が分かったと考えたから。

○なぜ怖い物知らずであった「僕」が, 実在しない「鏡」を作り出し, 自分自身に恐怖を抱くようになったのか。

理由: 心情が変化したきっかけが実在しない「鏡」であるのか, 他人が関わらず「僕」だけの話の中でなぜ変化したのか全く分からない。

○プールの仕切り戸の音(うん, うん, いや, うん)の効果は?

理由: 特に強調されており, 音に関してなら「バタン バタン」でもいいかもしれないのに, なぜ不思議な表現にしているのか。

○なぜ回想の後, もう一度現実に戻るのか。

理由: 「少年の日の思い出」では戻らないのでなぜだろうと思ったから。

理由: 「少年の日の思い出」と比べた時に, 「鏡」ではもう一度現実の場面に戻ってきているから。

○最後の2文は何のためにあるのか。

理由: 29段落の最後の問いかけで文章を終わってもよいが「ところで」という転換の接続詞を用いて, 30段落まで書いたことに文をつけたしていることに疑問を持ったから。

○伝えたいことは何か。

理由: 伝えたい事が分かれば, それを考える過程で自然と効果についても触れられると思うから。

資料Ⅱ 「鏡」初読の疑問

【「僕」について】

- ・(鏡の中の僕は)なぜ自分を憎んでいるのか。なぜ憎んでいると確信しているのか。(12人)
- ・「今から考えてみれば楽しい生活だったよ」と表されているにも関わらず, 鏡の中の自分が憎しみを感じているように思われた理由。
- ・なぜ自分自身が怖かったのか。(3) 怖いもの知らずなのに。
- ・なぜ木刀を投げたのか? (p105) (2)
- ・語り手は自分自身を怖いと思っているのか。
- ・どうして怖いのは僕自身なのか。鏡ではないのか。(2)
- ・僕が見たのは, ただの僕自身だけではなく鏡なのではないか。
- ・鏡を見ているときの心情。

- ・「僕」が鏡に対して違和感を感じたものの正体。
- ・なぜ幽霊だと考えないのか、あくまで自分自身だと？なぜ自分自身を見たと思ったのか。(7)
- ・鏡がなかったのに自分自身が見えたのはなぜか。(6)
- ・なぜ「僕」は下駄箱の横の壁に鏡があると感じ、「僕」の姿を見たのか。(2)
- ・鏡の中にいる僕が僕でないと分かった理由。(2)
- ・なぜ鏡が見えたのか。
- ・どうして「僕」は鏡を見たのか。
- ・1回目と2回目の見回りの間に鏡が現れたことの不気味さに語り手が気づいていない。(2)
- ・なぜ9時には鏡を見なかったのか。(2)
- ・なぜ直感的に「見回りたくない」と感じたのか。
- ・「すごく変な気がした」(p101 111)のはなぜか。虫の知らせではないのか。(2)
- ・「体が起きようとする僕の意志を押しとどめている」は一見冒頭の「虫の知らせ」にあたるように思える(2)・・・語り手がそれを否定している理由。(それを体験しているのに)(2)
- ・いまだに鏡を怖いと思っているのか。
- ・鏡をつけないのは鏡が怖いからで自分が怖いからではないのではないのか。
- ・なぜ夜警をしているタイミングでこの経験をしたのか。・・・鏡を見たのか。(4)
- ・僕は何歳くらいか。
- ・どうして煙草を吸ったのか。・未成年で煙草。
- ・主人公が体験したのは夢？現実？・夢なんじゃないの？(3)
- ・語り手が体験したことは何に分類されるのか。
- ・なぜ話そうと思えたのか。(p98)
- ・主人公の家にはなぜ鏡がない？(4)
- ・どこの主人なのか。
- ・散文的な人生とは？(3)

【「鏡の中の相手」について】

- ・なぜ鏡の中の相手は憎しみをもっていたのか。(8)
- ・鏡の中にいた僕を憎んでいるのは誰？正体は？(4)
- ・「僕」以外の「僕」とは？「僕がそうあるべきではない形の僕」とは何か(3)

【「鏡」について】

- ・鏡がなくなっていたこと。常識を越えていると思った。
- ・なぜ鏡が見えたのか。なぜ鏡が登場したのか。(4)
- ・鏡の割れる音は？幻聴？
- ・鏡は本当になかったのか。あるならなぜ翌朝にはなかったのか。

- ・実際にはなかった「鏡」は何を象徴しているのか。
- ・鏡がある意味。(3)
- ・語り手の見た鏡とは何だったのか。(5)
- ・思い切り投げつけられた鏡はどうなったのか。
- ・「窓から～及んでいた」(p103)鏡の中にも光が及ぶ意味は？(3)

【「みんな」について】

- ・みんなとは誰か。(2)
- ・この場には何人の人がいるのか。(3)
- ・どういう会なのか。語り手やみんなは何をしているのか。どういうシチュエーションなのか(10)
- ・登場人物が語り手以外は分からない、設定も分からない。
- ・この話を聞いた人の反応。

【情景描写について】

- ・本文中にたまに出てくる戸の音は何を指しているのか。プールの仕切り戸の話を入れた意味は？(14)
- ・ドアの開閉音が「うん、うん、いや、うん、いや、いや、いや」と表される理由。

【構成について】

- ・前置きの理由は？(3)
- ・冒頭のパターン分けの意味。(2)
- ・「で、そういったのを総合してみるとさ、～感じがするんだ」(p97)があるのはなぜか。(2)
- ・最後の2文は何のためにあるのか。30段落が書かれている意図は？(5)
- ・⑩と⑪段落の間で分けたのはなぜか。(⑬段落から怖い話の当日が始まっているので、⑫と⑬の間では？)
- ・最後の一文の意味。「本当の話」がひっかかる。(3)

【その他】

- ・自分自身以上に怖いものの他の例が知りたい。
- ・なぜ人間にとって自分自身は怖いものなのか？(3) どうしてそう思ったのか。
- ・自分が怖いとはどういうことか。
- ・今夜とはいつのことか。
- ・「この家」とはどの家のことか。
- ・K先生の喋り方はここからきているのかどうか？
- ・なぜ話し口調なのか。(2)
- ・火のついた煙草の伏線が回収しきれない気がする。
- ・伝えたいことは何？